（中日双语）

吴守蓉　宫林茂幸 ◎ 著

人类与森林共生

中日两国森林文化和森林环境教育之思考

森林共生社会の创造

中国と日本における森林文化と森林环境教育を考える

中国林业出版社

（中日双语）

人类与森林共生

—中日森林文化和森林环境教育之思考—

吴守蓉　宫林茂幸　著

中国林业出版社

图书在版编目(CIP)数据

人类与森林共生：中日森林文化和森林环境教育之思考 / 吴守蓉，[日]宫林茂幸著. —北京：中国林业出版社，2014.12
ISBN 978-7-5038-7766-7

Ⅰ.①人… Ⅱ.①吴… ②宫… Ⅲ.①森林－文化－对比教育－中国、日本②森林－生态环境－环境教育－对比教育－中国、日本 Ⅳ.①S7－05②S718.5－4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 286472 号

责任编辑：张 华 何增明

出版 中国林业出版社(100009 北京市西城区德内大街刘海胡同 7 号)
E-mail：shula5@163.com 电话：(010) 83143566
发行 中国林业出版社
印刷 北京卡乐富印刷有限公司
版次 2015 年 7 月第 1 版
印次 2015 年 7 月第 1 次
开本 787mm×1092mm 1/16
印张 16.25
字数 415 千字
定价 88.00 元

出版之际

1998～2000年我任日本林学会会长期间，组织日本森林学会与中国林学会进行了多次学术交流。在过去的15年里，中国经济高速发展加剧了环境问题。日本经济高速增长时期出现的各种问题和经验，使我深切地感受到在两国之间再一次就森林资源的综合管理方针进行更深入的讨论交流是非常必要的。基于此，我认为本书出版正当时机，感到由衷的高兴和敬意。我之所以这么认为，是因为健康安全的社会是建立在人类与森林共生的基础上的。本书提出创造森林共生社会，开展中日两国的森林文化和森林环境教育的比较研究，对于两国来说都是一部值得期待的著作。

据说，在中国面对激烈的经济竞争和拜金主义思想而导致的一些社会伦理丧失的现象，使得越来越多的人开始学习思考孔子儒家思想了。实际上，经济学之父亚当·斯密著有《国富论》的同时还著有《道德情操论》，描述了社会生活中的“同感”或者“共鸣”的重要性。当下，两国都要把目光投向对伦理的重要性的关注上，从更宽广的视角回顾各自的传统文化是十分必要的。基于此，本书论述的中国传统文化、日本的自然思想、森林文化、木文化等是符合时宜的。森林文化和森林环境教育作为解决当今环境问题的突破口，两位作者以各自的专业见解与经验为基础，对两国的森林文化、森林环境教育的历史、现状开展了学术研究，并指出创造人类与森林共生社会的路径，为此，我再次表示谢意。最近我从作者吴守蓉女士那里了解到中国正在开展生态文明建设，生态文明是超越工业文明的极限，实现人类社会、经济和自然资源可持续发展的新型文明形式。我感到本书以创造人类与森林共生的理想社会为目标，正是回到了生态文明建设的原点。

作者吴女士曾在我以前负责的东京大学森林经理学研究室留学，对森林经营和森林文化等进行了认真的研究，获硕士、博士学位。并作为日本学术振兴会研究员在东京农业大学宫林研究室里继续开展森林文化和森林环境教育研究。回国后从事森林环境政策与管理、森林文化领域的研究。她研究视野宽广，开展跨学科研究是值得期待的。

宫林茂幸先生与我是30多年的老朋友，东京农业大学“水稻的事情问水稻，农业的事情问农民”（走出象牙塔、跨进篱笆墙）治学理念在他身上得到了体现。他是一位重视实践的林业政策以及森林综合领域的林学专家，也是令人十分尊敬的“建设美丽森林”的领袖。两位作者共同著书出版让我感到世间不可思议的缘分的存在。

现在我作为已有131年历史的“社团法人大日本山林会”的负责人，致力于日本民间促进森林、林业的振兴。对于地球环境问题以及森林文化研究关注的同时，期待有一天为中日两国创建森林共生社会发挥一些作用。两国的产、官、学系统（产业、政府与学术界）的携手合作是不可缺少的。期待本书成为中日交流的桥梁。为本书出版表示祝贺！

社团法人大日本山林会　会长

箕轮光博

2013年10月20日

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

出版に寄せて

私は、1998年から2000年にかけて、日本林学会会長時代に、中国林学会と日本森林学会との交流を進める計画をたて、両国の間で数回にわたってシンポジウムを行ったことがあります。この15年間の中国の経済発展とそれに伴う環境問題の一層の深刻化を目の前にすると、日本の高度経済成長期における諸問題と経験を念頭に置きながら、もう一度、両国の間で、すべての分野を横断する統合的な森林資源管理の方策について議論を深め合う必要があると痛切に感じていたところでした。そのような折に、本書が、タイミング良く出版されたことに衷心から喜びと敬意を表せざるを得ません。なぜなら、健全な未来社会の土台をなすのがまさしく「森林共生社会」であり、その創造を日中両国における森林文化と森林環境教育の「比較研究」の観点から論究している本書は、日中両国にとって待望の書であるからです。

ところで、最近、中国では、孔子の儒学思想が見直されているとのことです。過度の経済競争は、社会倫理の低下につながることはよく知られた事実です。実際、経済学の生みの親であるアダム・スミスは、「国富論」と共に、「道徳情操論」も著し、社会生活における「同感」もしくは「共感」の大切さを説いています。我々は今こそ、倫理の大切さに目を向けると共に、より広い観点からはそれぞれの国の伝統文化を振り返る必要があるように思います。その意味では、本書が、「儒家」と「道家」の思想という中国の伝統文化や、日本の自然思想、森林文化、木の文化などの詳しく言及しているのは、時宜を得た企画です。さらに、呉、宮林両著者が、それぞれの専門的知見、経験を基に、両国の森林文化・森林環境教育の歴史と現状を学術的に研究し、今日の環境問題を解決する切り口として、森林文化、森林環境教育の必要性と、森林共生社会創造への道筋をつけてくれたことにあらためて謝意を表する次第です。また、最近、著者の一人である呉先生の話によれば、中国では「生態文明」建設が大きな目標になっているとのことです。生態文明は工業文明の限界を超え、社会・経済と自然資源が調和した持続可能な文明のあたらしい形であり、本書が目指している人間と森林の共生的な理想社会の創造はその原点に位置するような気がします。

さて、呉先生は、かつて東京大学農学系研究科修士・博士課程時代に、私の研究室（森林経理学）で、森林の経営及び森林文化などに関して真摯に研鑽し、農学博士の学位を取得し、次いで、日本の学術振興会の研究員として東京農業大学の宮林研究室で研究を重ね、現在中国の森林環境政策及び管理、森林文化等分野で活躍されています。加えて、氏は、視野が広く、学際的な研究者として将来を嘱望されています。

私は、もう一人の著者宮林先生とは30年来の友人であり、「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」という東京農業大学の校訓を体現している実践的林学者、特に林業政策や森林の総合利用の分野の専門家として、さらには日本における「美しい森づくり」のリーダーとして、大変尊敬しております。そのような二人がこのような形で共著者として新書を出版されることに不思議な縁を感じています。

現在、私は、大日本山林会（創立 131 年目）の責任者として、日本の民間森林・林業の振興に努力していますが、いずれは、地球環境問題や森林文化問題を視野に入れながら、日中両国における森林共生社会の創造に向けて一役買いたいと念願しております。そのためには、両国における産官学の連携・協働が不可欠であり、その折に本書が日中両国における架け橋となることを祈念して、出版のお祝いの言葉とさせて頂きます。

社団法人大日本山林会　会長
箕輪光博
2013 年 11 月 10 日

前言

人类祖先在与森林的接触中获得了各种技术和智慧，形成了人类与自然共生的循环型的大陆文化，是子孙后代传承的巨大的精神财富。森林是生命的源泉，森林文化是人类共通的文化，是根源性文化，是孕育了现代文明的根基。以森林文化为基础的森林环境教育在解决当今环境问题和培养良好环境意识的现代人才中发挥着重要作用。

当今的环境问题随着经济全球化的发展早已跨越国境，成为全球共同面临的问题。中国和日本均为世界经济大国，拥有巨大的经济实力，更重要的是地理位置相邻，同属东亚文化区域，具有很深的历史文化渊源。因此，在解决环境问题时两国的交流与合作是十分有意义的，森林文化的交流就是其中之一。本书以在人类历史中占有重要地位的森林文化以及传承与发扬森林文化中发挥着重要作用的森林环境教育为重点，对中日两国所开展的森林文化与森林环境教育的理论观点和实践方法进行研究，探讨人类与森林共生的道路，为环境问题解决提供参考与借鉴。

现代文明发展日新月异。随着先进科学技术发展和人类经济活动的全球化，在某种意义上可以说人类逐渐向着无国界社会（borderless society）方向发展，经济活动和各种交流日益频繁。尤其是IT技术的发展加速了国家与地区的国际化进程，全球信息共享已成为可能。在这样的背景下，环境问题和环境危机成为全球性的课题，也是人类社会面临的共同课题，并由此产生了非常多的交流与合作机会。

人们已经认识到，当今环境的破坏及其影响并非局限于某一国家或地区，随着经济全球化发展，环境的破坏和影响已经跨越国境，向全地球范围扩展。人类社会共同来创造良好的环境循环型社会，使人类社会健康、可持续发展，这是我们在探讨解决环境问题的根本目的所在。重新建立人类与自然共生关系，在当今重视市场原理和效益的物质文明社会的发展中显得尤为重要。我们

应该超越市场经济原则，创造出可持续发展的人类与自然共生的社会。为此，我们需要重新构筑起人与人的共同关系、人与自然的共生关系，把人类社会已有的智慧继承下去、发扬下去。因此，开展森林环境教育、振兴森林文化是不可缺少的。

战后美国式西方文明进入日本，成为日本战后发生质变的日本资本主义发展的原动力。同时一个以经济效益至上为核心的“效率文明”也被引入了日本。通过资本扩大和高效率运转，美国垄断资本源源不断进入日本，很快就支配了日本经济。日本国民不断抛弃日本远古流传下来的本国文化而热衷于美国式新文明，逐渐成为机械文明的俘虏。最终的结果是农、林、牧、渔等基础产业严重衰退，造成了城市与农村不均衡发展，原本生物多样性丰富、实现了自然良性循环模式的里山文化等传统农村文化不断消失。

最近30多年来，中国实行改革开放，向市场经济优先的经济结构急速转变，社会、经济和环境发生了巨大变化，与以前的日本极为相似，都是在追逐现代化的“效率文明”。“效率文明”以其“万能”而被世人奉若至宝，但是这个宝物却引起了“浪费”和“不均衡”等社会问题，造成了不可逆转的各种环境问题。地球资源是有限的，文明的发展终将要受到资源条件的制约。

霸权式的资本主义是通过资本的多国籍化（跨国公司）而重新支配世界，向着无视民众生活的市场优先主义方向发展，并非向着促进各个国家健康发展，以及根本解决环境问题的方向发展。只顾眼前不管将来的资本运行方式，加剧了环境问题在更多国家和地区扩大。要想脱离这样的环境危机，日本如果依旧延续美国式的资本主义发展方式是根本不可能解决危机的，而转向一种新型的环境资本主义——即提倡充分考虑环境因素的投资行为、生产方式和消费方式，这是值得期待的。要最大限度地从以追求经济为目的物质维度的资本投资运行机制向有社会责任心、有计划的精神维度的投资行为转变。

科学技术发展所引起的负面经济影响可以通过科学的力量予以解决，这种观点广泛传播，而且被一些人认为是正确的。但是，我们应该意识到这不过是解决了表面问题，而非实质性彻底的解决。最本质的是要减少满足国民健康生活所需之外的物质消费（浪费）。科学技术发展推动着生产扩大、消费增加，经济发展成为可能。在市场优先原理下，不断重复进行着的资本投资，形成了对地球资源掠夺性利用的再生产方式。在这样的生产方式下，环境危机是不可避免的。现代社会面临着地球气候变暖、气候异常、酸雨、水质污染和森林破坏等全球性的环境问题。对于解决这些环境问题，在期待科学技术发展的同时，也需要回到人类社会发展的原点森林文化，各个地域遗留下来人类与森林共生的文化力同样值得我们期待。同时在思考解决现代社会的种种矛盾时，如

何构建环境共生型的在生产模式是一个重大的课题。

中国经济持续高速发展令世界瞩目。但是，中国正面临着大气、水和废弃物污染等公害问题，以及森林、水等资源不足和沙漠化等问题。特别是最近北京等城市 PM2.5 空气污染等公害问题引起了邻国乃至世界极大的担忧。日本战后经济增长迅速，同时产生了严重的环境问题，一度曾被称为“公害大国”，但是日本通过制定完善法律制度，大力实施全民环境教育，发展循环经济与环保产业，克服了环境问题，并成为世界上屈指可数的富裕的发达国家。目前，借鉴日本的经验解决中国的环境问题是十分有意义的。

人类是从森林中走出来的，森林文化是人与自然关系的源泉所在，是文化的原点。现在遭遇环境问题时我们需要回到人类文化的原点森林文化来寻找答案。森林文化意义深邃，学问深厚，我们可以从中学到真正的智慧。创建人类与森林的共生的社会是我们所期待的。

本书从以创建人类与森林共生的社会为目标，从三个维度展开论述。第一维度从森林资源的利用和森林文化发展展开。介绍日本森林文化研究领域著名学者的理论观点，对日本丰富的森林文化研究成果，从森林文化的宗教论、政策论、功能论、价值论、技术论以及教育论等多视角举行了探讨，并对日本照叶林文化、枹栎树林等典型森林文化进行了介绍。日本将森林文化融入到山村区域建设中以期实现山村经济振兴，创建人类与森林共生的社会，对其理论基础和实践事例进行了分析。另一方面，森林是森林文化的载体，针对中国森林资源较少的现状，对中国森林资源减少的原因、恢复造林的努力、森林政策历史演变，以及传统文化中人与自然的关系、森林文化思想等进行了回顾，提出振兴森林文化的建议。第二维度从环境教育展开，对中日环境教育的发展历史和各自特点进行了梳理。第三维度从森林文化与环境教育的融合——森林环境教育展开。对中日两国的森林环境教育的历史发展脉络和现状进行了梳理，并探讨森林环境教育学的创建与学科地位。开展了中日森林环境意识的调查的比较研究，分析各自特点和存在问题，强调森林体验的重要性。森林文化与森林环境教育关系十分密切，开展森林环境教育要以森林文化为基础，森林文化的振兴与传承则需要通过森林环境教育来实现。通过对中日两国森林文化和森林环境教育的理论观点和实践方法的探讨总结，为创建人类与森林共生的社会探索道路。

当今，中国正在开展生态文明建设，建设美丽中国，恢复美好山河，这也正是振兴森林文化、开展森林环境教育的大好时机。本书能在这样的背景下出版，我们感到很幸运。

本书出版获得中央高校基本科研业务专项资金“中国生态建设研究”项

目（TD2011－16）资助。部分内容属于日本学术振兴会研究课题“中国森林环境意识及森林环境教育研究”的研究内容。同时作者吴守蓉自2013年7月起作为日本东京大学特聘副教授在东京大学工作近一年，对原有书稿进行了补充写作，也是东京大学工作期间“基于环境保护视角的中日森林与林业政策比较研究”项目的一部分成果。宫林茂幸也对书稿做了大量补充修改。

本书为中文日文双语版本。中文版中第1、2、3、4、7、8、9章由吴守蓉执笔，第5、6章由宫林茂幸执笔。日文版中第1、2章由宫林茂行执笔，第3、4、5、6、7、8章由吴守蓉执笔。

本书出版得到中日两国众多老师、朋友和学生的帮助，在此表示衷心感谢！

吴守蓉　宫林茂幸
2013年10月28日

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

まえがき

私たちの先人たちは森林から学び、それを知恵とし、技術として発展させ、地域特有の文化を形成してきた。その多くは自然と共生する優れた循環型の大陸文化であり、「ものづくり」や「ひとづくり」に関して、古代より育まれた質の高い精神文化遺産として継承しているものである。

森は生命の元であり、森林文化は人類共通的、そして根源的の文化であり、現代文明を育て、培ってきた基盤であるといえる。現在、地球規模で環境問題が直面している時期に、地域文化の源泉である森林文化という原点に振り返り、環境問題を解決する処方箋を探す時代といえる。

今日の環境問題は、その被害・影響が一国内にとどまらず、経済社会のグローバル化とともに国境を越え、ひいては地球規模にまで広がる問題として認識されるようになった。また、経済大国である日本と中国は、地理的にも隣接し、東アジア文化圏に属し、多様な文化を共有する場面があるとともに、文化的にも、歴史的にも繋がりが深い。従って、環境問題を解決するためには、両国の密接な交流及び協力を深めることが重要である。森林文化における交流はその分野の一つである。著者は、森林と人類が進めるべき共生社会への道を探り、環境問題の基本的な解決に資することを目的に、日本と中国の森林文化研究のあり方と森林環境教育の進め方について研究した内容を本書にまとめることとした。

近代文明における先進科学技術の発達は、経済活動のグローバル化を進め、人類はボーダレスな社会を形成しつつ、相互に経済的な繋がりを発展させるとともに、多様な国際交流が進められるようになった。特に、IT 技術の発展は、国際化を急速に進め、日常的に国際社会の情報を享受することが可能となった。こうした中で、環境保全や環境危機に関する環境問題は、水質汚染など日常生活をふまえつつ、温暖化や大気汚染のように地球規模の課題として展開しており、人間社会にとって共通の課題として、最大のコミュニケーションの機会を生み出しているといえる。

市場原理を優先し、経済効率を重視した物資文明社会を進める中で、失われつつある自然との共生関係を再構築する必要があろう。つまり、共生関係とは生活の知恵として築き上げてきた共生による社会関係であり、再構築とは、人と人の共同、人と自然の共生の関係を再生することにある。そのためには、森林と共生し、森林を賢く活用してき

た森林文化を再生することと、それを具体的に進めるための環境教育の推進が不可欠であるといえる。

今日、世界をリードしているアメリカの西洋文明は、戦後の日本資本主義を発展させる原動力となったと同時に、もう一つ持ち込んだものは経済効率至上主義という「能率」文明であった。巨大資本の効率的な投資を拡大することによってアメリカの独占的資本はたちまちにして日本経済を支配し、日本国民は古来の日本文化の多くを売り渡しつつ、熱中してアメリカ文明の新しく便利な機械文明のとりこになってしまった。その結果、基層産業である農林漁業は大きく衰退し、都市部と農山村部における不均衡発展を生み、暮らしを支える生物多様性や自然循環型の大切な里山文化や農村文化を消滅させつつある。他方、現在の中国は改革開放の路線に転換し、急速に外国資本を導入し、市場経済を優先する経済構造へ急速に転換しつつある。その結果、特に、社会経済の構造や自然環境の変化について、かつての日本と同じように、近代化の「能率」文明を急速に追いかけていることに注目する必要がある。万能で「宝物」と思われている「能率」はその行く末に「浪費」と「不均衡」という大きな社会問題を生み、その結果、不可逆的で、差別的な環境問題を抱くのである。いうまでもなく地球の資源は有限であることから、資本の運動法に伴う文明の発展は最終的に資源に制限されているのである。

パクスアメリカーナによる覇権的資本主義体制は、資本の多国籍化（多国籍企業）による新たな世界支配を進めようとするもので、国民生活無視のさらなる市場優先主義を進め、各国の健全な発展や環境問題を基本的に解決できる方向となっていないからである。つまり、「後は野となれ山となれ」の資本による開発が進み、資本の動きとともに環境問題が拡大することとなる。この環境危機から抜け出すには、日本社会がそうであったようにアメリカ型資本主義を進めても決して解決できないということである。環境を考慮した投資による生産と環境を配慮した消費という新たな環境資本主義へと転換させることが必要といえる。最大限に目的投資する物質的な投資次元から計画的に責任を持って投資する精神的な投資次元へと座標軸の転換が課題となってきた。2012 年のリオ20において採択された「グリーン・エコノミ」は、まさに新たな経済的枠組みを打ち出した物に他ならない。

科学技術の発展がもたらした負の効果は、科学の力によって排除するべきだという考え方は正しいように響く。しかし、それはあくまでも相対的な解決しか与えないことを知っておくべきである。科学技術の発展が生産を拡大し、消費を増大させることによって経済発展が可能となるような市場原理を優先する経済体制は、資本の再投資を繰り返し行い、地球の自然資源の略奪的な生産システムを進めることとなり、そこから発生する環境危機を回避することは困難であろう。現代社会が抱える地球温暖化、酸性雨、異常気象、水質汚染、森林破壊などの地球規模の環境問題に対処するには、科学技術の発展に期待することとともに、われわれは人類社会の発足の原点である森林文化を振り返り、地域に存在する自然と共生する文化の力に頼ることも大事である。

今日、中国における急速な経済成長は世界中で注目されている。しかし、中国は、大気汚染、水質汚濁、廃棄物による汚染などの公害問題と、森林、水資源の欠乏、砂漠化などの自然破壊問題など複合的な環境問題に直面している。特に、近年の北京等都市に

おけるPM2.5大気汚染問題は、近隣諸国をふまえ大きな関心事になっている。戦後における急速な高度経済成長に伴って、日本は深刻な環境問題を引き起こした。その結果、日本は「公害大国」とも呼ばれ、「公害」が世界共通語となった。こうした中で日本は、1970以降、公害規制や環境保全に関する法律・制度を精力的に策定・補完し、加えて、国民に環境教育を実施し、循環型経済および環境にやさしい産業が推進され、環境問題の壁を乗り越えつつある。少なくとも公害問題に関する諸問題は乗り越えることができたといえる。現在日本は、経済成長は低迷しているが国民所得や社会資本投資などにおいて世界でも有数の豊かな先進国となった。他方、中国は、急速な経済発展を進める中で、「公害大国」という「月桂冠」を頭にかぶることとなった。そしてこの帽子を摘出するためには、日本の経験を生かすことによって、中国の環境問題を解決の方向に導くことができるだろう。

本書では森林と共生社会の創造に向かって、三つの次元から展開することとした。第一次元は、森林資源の利用及び森林文化の発展から展開する。日本における森林文化研究分野で有名な学者達の森林文化論の特徴を紹介し、豊富な森林文化研究成果を森林文化の宗教論、政策論、機能論、価値論、技術論及び教育論等の視点から論述した。次に、日本において典型的な照葉樹林文化、ブナ文化等を紹介する中で、日本においては森林文化を追求することで、地域の再生に融合し、農山村地域の振興、森林との共生社会の創造を狙うという特徴について、その理論的基礎及び実践事例を分析した。一方、森林資源に乏しい中国の現状について、森林資源の減少の原因、復旧造林等森林政策の遷移を振り返って、森林文化の振興について考察した。第二次元は、環境教育から展開し、日中環境教育の歴史及び両者の特徴を検討した。第三次元は、森林文化と環境教育の融合——森林環境教育の在り方について述べる。日中における森林環境教育発展の歴史的遷移及び現状を整理し、森林環境教育学としての位置づけを検討した。日中森林環境意識の比較研究を行うとともに、両者の特徴及び問題点を分析し、森林体験の重要さを論じた。森林文化と森林環境教育は緊密な関係があり、森林環境教育は森林文化を基に行うとともに、森林文化の振興・継承には森林環境教育を通して行われることが効果的である。中日両国の森林文化と森林環境教育の理論・観点及び実践方法の検討を通じて、森林共生社会の創造の道を探ることが本書の最終目的であった。

今日、中国では「美しい中国」を目指して「生態文明」政策を展開していることから、森林文化を振興、そのために森林環境教育を推進する絶好のチャンスといえる。本書がこのような背景に出版できることは、我々とって好機であるとともに、この上ない幸いと思っている。

本書の出版は、中国中央に所属する大学の基本研究業務資金プロジェクト「中国における生態建設に関する研究」（TD2011－16）の支援により実現したものである。一部の内容は日本学術振興会の研究プロジェクト「中国における森林の環境意識及び環境教育に関する研究」の成果の一部である。著者呉守蓉は東京大学の客員准教授として2013年7月に再び東京大学に戻って、資料をもとに本書の補充を行い、さらにこの期間の研究プロジェクト「森林・林業政策における環境配慮に関する日中比較研究」の一部の研究成果となっている。

本書は中国語と日本語をバイリンガルバージョンになっている。中国語バージョンに

は、第1、2、3、4、7、8、9章は呉守蓉が執筆し、第5、6章は宮林茂幸が執筆した。日本語バージョンには、第1、2、5，6、7、8章は呉守蓉が執筆し、第3、4章は宮林茂幸が執筆した。

本書の完成するにあたって日中両国に多数の先生方をはじめ、友人及び学生たちのご支援とご協力を賜った。ここに感謝を心から申し上げる次第である。

呉守蓉・宮林茂幸
2013年10月28日

目 录

出版之际

前言

第一部 日本篇

第一章 日本森林文化概念 ……（025）

第一节 日本森林与森林利用历史……（025）

一、森林大国日本……（025）

二、日本森林利用历史……（027）

三、日本文化与森林的交融……（028）

第二节 森林文化的概念“山、木与人的融合” ……（030）

第三节 森林文化理念模式……（033）

第四节 日本式森林文化建设模式……（034）

第二章 日本森林文化论 ……（037）

第一节 日本著名学者森林文化论研究成果……（037）

一、日本人的自然观……（038）

二、森林与人类的文化史……（039）

三、森林型思考与沙漠型思考……（039）

第二节 森林文化宗教论……（042）

一、森林文化之平等原理和循环的思想……（042）

二、阿伊努人送熊仪式与泛灵论……（042）

三、古树是神……（043）

四、日本佛教变成了森林的宗教……（044）

五、日本文化论与森林文化论……（045）

第三节 森林文化政策论……（046）

一、森林文化政策的研究……（046）

二、传统的“林野入会”制度 ……（047）

三、日本森林管理三大制度支柱……（047）
第四节　森林多种功能论……（049）
一、森林三大原理与八大功能……（050）
二、森林的双重特性……（051）
第五节　森林文化价值论……（052）
一、环境经济学对森林价值的分类……（052）
二、从时空动态视角看森林价值……（052）
三、森林文化的经济价值……（053）
第六节　森林文化技术论——森林经营与管理……（053）
一、森林经理学中蕴藏着森林文化创造技术与思想……（053）
二、景观林业（landscape forestry）的实践 ……（054）
三、日本森林经营研究与实践最前沿——森林团地法人化经营 …（054）
四、森林团地法人化经营文化论……（055）
第七节　森林文化环境教育论……（056）
第三章　典型的日本森林文化 ……（059）
第一节　日本照叶林文化……（059）
一、照叶林的特征与分布……（059）
二、照叶林文化的概念……（060）
三、照叶林文化的发展过程与特色……（061）
四、绫町照叶林及其文化的保护……（062）
第二节　中国照叶林以及照叶林文化……（063）
第三节　枹栎树林文化……（065）
一、枹栎树林带的特征……（065）
二、白神山地 ……（066）
三、青秋林道建设反对运动……（067）
第四节　里山杂木林文化与人工美林文化……（068）
一、里山杂木林文化……（068）
二、人工美林文化……（069）
第四章　日本森林环境教育 ……（072）
第一节　日本环境教育与发展历程……（072）
一、环境的定义……（072）
二、环境教育的定义……（072）
三、日本环境教育发展历程……（073）
第二节　日本森林环境教育的概念……（075）
一、森林环境教育的概念……（075）
二、森林教育与野外教育……（075）
三、森林环境教育学……（076）
第三节　日本森林环境教育的发展过程与借鉴……（077）
第四节　中日森林环境意识比较研究……（081）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com